猟師と薬屋の話

小川未明

青空文庫

村に一人の猟師が、住んでいました。もう、秋もなかばのことでありました。ある日知らない男がたずねてきて、

「私は、旅の薬屋でありますが、くまのいがほしくてやってきました。きけば、あなたは、たいそう鉄砲の名人であるということですが、ひとつ大きなくまを打って、きもを取ってはくださらないか。そのかわり、お金はたくさん出しますから。」といいました。

猟師は、貧乏をしていましたから、これはいい仕事が手にはいったと思いました。

「そんなら、くまをさがしに山へはいってみましょう。」

「どうぞ、そうしてください。このごろ、くまのいが、品切れで困っているのですから、値をよく買いますよ。」と、薬屋はいいました。

　これをきいて、猟師は、よろこんで引き受けました。村から、西にかけて、高い山々が重なり合っていました。昔から、その山にはくまや、おおかみが棲んでいたのであります。

　猟師は、仕度をして、鉄砲をかついで山へはいってゆきました。霧のかかった嶺を越えたり、ザーザーと流れる谷川をわたって、奥へ奥へと道のないところをわけていきますと、ぱらぱらと落ち葉が体に降りかかってきました。

　猟師は、しばらく歩いては耳をすまし、また、しばらく歩い

ては耳をすましたのです。そして、あたりに、猛獣のけはいはしないかと、ようすをさぐったのでした。

そのうちに、目の前に、大きな足跡を見つけました。

「あ、くまの足跡だ！」と、猟師は思わずさけびました。

これこそ、天が与えてくださったのだ。はやく打ちとめて家へしょって帰ろう。そうすればきもは、あの旅の薬屋に高く売れるし、肉は、村じゅうのものでたべられるし、皮は皮で、お金にすることができるのだ。こう思いながら、肩から、鉄砲をはずして、弾丸をこめて、その足跡を見失わないようにして、ついてゆきました。

裏山は、雲が切れて、秋の日があたたかそうに照らしていま

した。そして、二、三十メートルかなたに、大きなとちの木があって、熟した実がぶらさがっていましたが、その下に黒いものがしきりに動いているのを見つけたのです。

「いた！　いた！」と猟師は、低い声でいいました。そして、じっと気づかれないように木かげにかくれて、ようすをうかがいました。その一匹は大きく、その一匹は小さかったのです。小さいのは、まだ生まれてから日数のたたない子ぐまで、大きいのは、母ぐまでした。二匹は、いま自分たちが、人間にねらわれているということもしらずに、楽しく遊んでいたのであります。子ぐまは、お乳を飲みあきたか、それとも、とちの実をたべあきたか、お母さんの背中に乗ったり、また、胸のあたりに飛びついたりし

ました。母ぐまは、それをうるさがるどころか、かわいくて、しかたがないというふうに、子ぐまのするままにしていたが、ときどき、自分でひっくりかえって、子ぐまを上に抱きあげ、子ぐまがぴちぴちするのを見て喜んでいたのでした。

　猟師は、鉄砲のしりを肩につけて、ねらいを定めました。名人といわれるだけ、万に一つも打ちそんじはないはずです。そして、引き金をおろしかけて、ふと打つのをやめてしまいました。

「あの母ぐまを殺したら、どんなに子ぐまが悲しがるだろう。そして、晩から、あたたかなふところに抱いてもらって眠ることができない。かわいそうな殺生をばしたくない。」

　こういって、猟師（りょうし）は、打（う）つのをやめて、また、出直（でなお）してこようと家（うち）へもどろうとしたのであります。

　その途中（とちゅう）で、知（し）らない猟人（かりゅうど）に出（で）あいました。その猟人（かりゅうど）もこれから山（やま）へ、くまを打（う）ちにゆこうというのです。その男（おとこ）は、傲慢（ごうまん）でありまして、なにも獲物（えもの）なしに帰（かえ）る猟人（かりゅうど）を見（み）ますと鼻（はな）の先（さき）で笑（わら）いました。

「私（わたし）は、これまで山（やま）へはいって、から手（て）で家（うち）へ帰（かえ）ったことはない。こんどもこうして山（やま）へはいれば、きつねか、おおかみか、大（おお）ぐまをしとめて、土産（みやげ）にするから、どうか私（わたし）の手並（てなみ）を見（み）ていてもらいたいものだ。」と、大口（おおぐち）をききました。

　これにひきかえて、母子（おやこ）のくまを打（う）たずにもどったやさしい猟（か）

人は、どうか、はやく、あの母子のくまはどこかへ隠れてくれればいいと思いながら歩いてきました。

　家ではおかみさんが待っていました。

「うちの人は、久しぶりで山へはいったのだが、いい獲物を見つけて、うまくしとめて、無事にもどってくればいい。そして、くまのいがいい値で売れたら、子供にも春着が買ってやれるし、暮らしもよくなるだろうし、こんないいことはないのだが。」と、思っていました。そこへ、夫がから手で、帰ってきましたから、「獲物が見つかりませんでしたか。」と、ききました。猟師は、見つけたが、母子ぐまが、平和に無邪気に、遊んでいるので、かわいそうで打てなかったと答えました。

　すると、おかみさんが、またやさしい心の人で、
「それは、いいことをなさいました。親子の情に、人間もくまも、かわりはないでしょう。思いやりがあるなら、どうしてそれが打たれましょう。また、日をあらためて、お出かけなさいまし。」といったのであります。
　二、三日たってから、猟師は、ふたたび鉄砲をかついで出かけました。すると途中で、なんでもこのあいだのこと、猟師が山でくまを打ちそこねて、くまのために大けがをして山を下ったという話をききました。
「それなら、自分がもどるときに、出あったあの猟師でなかろうか。たいへん自慢をしていたが、きっと打ちそこねて、くまに

かみつかれたのかもしれない。」と、猟師は考えました。
一度、そんなことがあると、くまは気がたっていますから、もし、こんど人間を見たら、どんなに怒って飛びかかってくるかもしれないと考えましたから、猟師はすこしも油断をせずに山の中へはいってゆきました。
この前、母ぐまと子ぐまの遊んでいた、裏山までやってきました。ああ、ここだったなと思ってながめますと、そのときと同じように、とちの木の葉は、黄色にいろづいて、熟した実がいくつも、いくつもぶらさがっていました。しかし、くまの姿は、今日は見えませんでした。
「あの猟師の打ったくまというのは、あのときの母ぐまではな

かったろうか。」と、猟師は思いました。
もし、そうであったら、あの母ぐまと子ぐまは、いまごろどうなっているだろうと考えながら、一歩、一歩、奥へとはいってゆきました。
たちまち、猟師は、草の倒れているところへ出ました。それは、くまが、もうすこし前に通ったあとでした。こうなると、いつ、どこからくまが飛び出してくるかわからないので、猟師は用心の上にも用心をして、ゆきますと、どこか、あちらのがけのあたりで、ものすごいうなり声のようなものがきこえました。
「あ、こないだの猟師に打たれた、くまが傷をうけて倒れているのだな。」と、猟師はすぐに頭に浮かびました。

「よし、おれが、今日（きょう）はしとめてくれるぞ。」と力（りき）んで、猟師（りょうし）は足音（あしおと）を忍（しの）んで、近（ちか）よって、そのようすをうかがいました。ところがどうでしょう。倒（たお）れているのは、まさしくこのあいだの母（はは）ぐまであって、子（こ）ぐまが、かなしそうに、お母（かあ）さんの傷口（きずぐち）をながめながら、なめては、またなめているではありませんか。

　これを見（み）た猟師（りょうし）は、どうして、鉄砲（てっぽう）を向（む）けることができましょう。彼（かれ）は、気（き）づかれないように後（あと）ずさりをしました。そして、また、くまを打（う）たずに家（いえ）へもどったのでありました。

「ああ、暮（く）らしのためといいながら、なんて殺生（せっしょう）するのはいやな商売（しょうばい）だろう。あのくまを殺（ころ）すのはぞうさもないが、金（かね）のために、そんなむごいことができようか。」と、猟師（りょうし）がため息（いき）

をつきました。

　ところが、困ったことには、おかみさんが重いかぜにかかって、どっさり床についたのです。貧乏で、医者にかけるどころか、あたたかなおいしいものをたべさせることもできません。頼むところはなし、どうすることもできなく、猟師は自分のだいじな鉄砲を売ろうと決心しました。なぜならほかに、売るような金目の品物は、なんにもなかったからです。

「これを手放してしまえば、明日から、自分は、猟にゆくことができない。」と、思いましたが、妻が病気なら、そんなことをいってはいられませんので、ある朝、鉄砲を持って、町へ出かけようとしました。

ちょうど、そこへ、旅の薬屋さんがやってきました。あれから、くま打ちにいかなかったかと、たずねましたから、猟師が、その後のことをすっかり打ち明けて物語ったのでした。だまってきいていた薬屋さんが、いくたびもうなずいて、

「いや、やさしいお心がけです。それでこそ、ほんとうの人間です。私は、こうして真正のくまのいをさがしていますのも、人の命を助けたいためからで、ただ金もうけのためばかりではありません。きけばお困りになって、商売道具をお売りなさるとか、とんだことです。私は、ここに金を置いてゆきますから、このつぎきますまでに、そんなかわいそうなくまでない、もっと恐ろしい大ぐまをしとめて、きもをとっておいてください。」と

いって、金(かね)を渡(わた)してゆきました。

あとで、この話(はなし)きいた村(むら)の人(ひと)たちは、猟師(りょうし)をほめれば、また薬屋(くすりや)さんを感心(かんしん)な人だ《ひと》といって、ほめたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　10」講談社
　　1977（昭和52）年8月10日第1刷発行
　　1983（昭和58）年1月19日第6刷発行
※表題は底本では、「猟師《りょうし》と薬屋《くすりや》の話《はなし》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：仙酔ゑびす
2012年2月19日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

猟師と薬屋の話

小川未明

２０２０年　７月１３日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/